

第23回 福岡アジア美術館  
アーティスト・イン・レジデンスの成果展 2024

# 周縁からはじまる

## 作家の言葉

「博多べい」と呼ばれる壁がある。1587年に豊臣秀吉が戦災などで荒廃した、博多の町を復興するために実施した博多町割りの際に作られたそれは、焼け瓦や焼け石などを塗り込めて作られた。レジデンスを始めるにあたって色々と考えた結果、以前から興味を持っていたこの壁をモチーフとしてリサーチを開始することにした。この壁に含まれる多くの建材はもともと別の建築に利用されていたものだとされている。ある種のバラック建築のように建てられたそれは、合理的に制作されたのであろうが、戦災の記憶を内包したモニュメントとして捉えることが可能だろう。個別の家屋や生活に根ざした断片が解体され、一つの平面として立ち上がる様子は、個人的な話であるが、私が普段制作している絵画作品の制作方法とも繋がるように感じたからだ。

今回の展示では、9月に発表した作品『準備室：解体された壁のためのストレッチ』も含めた4つの作品群による展示を行う。各作品に関して、個別の解説は省くが、先述した「博多べい」を含めた「壁」と呼ばれる存在を通して、福岡という都市について思考をめぐらせてみることにした。

浦川 大志

《オープンパノラマ：糞虫のためのスケッチ、あるいは焼けた壁についての個人的なカーテン》  
ミクストメディア / サイズ可変 / 2024年